



■藤尾の気質(『草枕』那美さんの気質)

[第一幕第三場]

I would I had thy inches; thou shouldst know there were a heart in Egypt.

「私に汝の身長があったなら；エジプトの勇気を示せたのに」

■第五章：藤尾と糸子の会話で、雨が『空の中から降るとは受け取れぬ、地の上に落つるとはなおさら思えぬ。糸の命は僅かに尺余りである』話が悪い方向へ進む前兆。

[第四幕第三場] 兵士たちの会話より。

**Fourth Soldier)** Peace! What noise? **First Soldier)** List, list! **Second Soldier)** Hark! **First Soldier)** Music i' the air. **Third Soldier)** Under the earth. **Fourth Soldier)** It signs well, does it not? **Fourth Soldier)** No.

「しっ！何だ、あの音は？」「静かに、耳を澄ませろ！」「聞け！」「空から音楽が」「地下からだ」「いい前兆じゃないのか？」「いや」

■どんな女性でも持っている「女としての特質」の告白。漱石は非難しながらも、シーザー同様にそれを認めようと努力した。このクレオパトラの言葉遣いは、法廷弁論のようである。そこには『人形の家』のノーラ、『草枕』の那美さんに共通する、愛という人情への考慮なしに法律で制する男性社会に対する女の訴えかけが見て取れる。

[第五幕第二場] クレオパトラの言。

**CLEOPATRA)** ..... I cannot project mine own cause so well to make it clear; but do confess I have been laden with like frailties which before have often shamed our sex.

「私は身の潔白を証明することが出来ません；けれど告白すると、昔からしばしば女性の面目を失わせた脆さに、私も悩んできたのです」

## II. Hamlet (ハムレット)

■第十一章：『<sup>まず</sup>無味くって<sup>あた</sup>中らない形容は哲学である』

[第一幕第五場] ハムレットの言。

「何が何だかわからない」というホレイシオの言葉を受けて、

And therefore as a stranger give it welcome. There are more things in heaven and earth, Horatio, Than are dreamt of in your philosophy.

「だからあるがまま受け入れろ。天と地の間には、ホレイシオ、いわゆる哲学じゃ想像もつかないことがあるんだよ」

[第二幕第二場] ハムレットの言。

内容の良い一座より、目新しい子供の一座がもてはやされる。自分の父が生きていた当時は疎まれていた叔父の肖像画が高く売れる世の中の変遷に対して、

'Sblood, there is something in this more than natural, if philosophy could find it out.

「くそっ、普通じゃない、哲学では説明できない」

■第十二章：『沙翁は女を評して脆きは汝が名なりといった』

[第一幕第二場]

Frailty, thy name is woman. (脆き者、汝の名は女)

■血縁も心のつながりも薄い、なさぬ仲の母と欽吾。[第一幕第二場] A Little more than kin, and less than kind! (血縁は濃くなったが、心のつながりは薄くなった！)

王妃とハムレット。藤尾の母は甲野欽吾を狂気に仕立て、欽吾もハムレット同様そのフリをした。第五幕第二場のオズリックの遠回しな言い方は、藤尾の母「不経済な女」を思わせる。また時勢に合わせて社交辞令で生きる人間を、儂い泡に例えるハムレットの言葉は、漱石の主張と共通する。また第五幕第一場の墓掘人夫の会話によれば、死因によって弔いする方法も変わるのに、自ら死へ赴いたオフィーリアの葬儀が、きちんと執り行われたのは身分ゆえである（日本では死者への許し）。黒髪をそのままに流す藤尾の亡骸はオフィーリアの姿そのものである。戯曲として語られるイギリスの狂気と、漱石の現実としてのイギリスでの神経衰弱が一致したところが皮肉である。

### III. THE TRAGEDY OF MACBETH (マクベス)

■第十章：『悲劇「マクベス」の妖婆は鍋の中に天下の雑物を攫い込んだ。石の影に三十日の毒を人知れず吹く夜の墓と、燃ゆる腹を黒き背に蔵す蠚蠖の胆と、蛇の眼と蝙蝠の爪と、一鍋はぐらぐらと煮える。妖婆はぐるりぐるりと鍋を廻る』

[第三幕第五場]

Round about the caudron go; In the poisoned entails throw: Toad that under cold stone days and nights has thirty-one. Sweltered venom, sleeping got, Boil thou first i'the charmèd pot.

Fillet of a fenny snake in the cauldron boil and bake; Eye of newt, and toe of frog, Wool of bat, and tongue of dog, Adders fork, and blind-worm's sting, Lizard's leg and howlet's wing, For a charm of powerful trouble, Like a hell-broth, boil and bubble.

「大釜をぐるりと廻り；毒の雑物放り込め：三十一日三十一夜冷たい石の下の墓蛙。毒液流し、眠りについた、まず汝を魔法の釜で煮てやろう」

「大釜の中で煮て焼こう 沼地の蛇の切り身；イモリの目玉、蛙の足指、蝙蝠の毛、犬のベロ、mamushiの舌、それからアシナシヘビトカゲの牙、トカゲの脚とフクロウの翼、強烈トラブル呪文のために、地獄のスープのように、煮えたぎれ」

■第十六章：『西洋へ行くと人間を二た通り拵えて持っていけないと不都合ですからね』

『不作法な裏と、綺麗な表と。厄介でさあ』

[第一幕第一場]

Fair is foul, and foul is fair. (綺麗は汚い、汚いは綺麗)

「まことしやかなものは邪悪で、邪悪なものはまことしやかなものである」

#### ■水

漱石作品とシェイクスピア作品に共通すること。それは人の本心を映す鏡と、地上の黒い罪を洗い流す白い雨である。そしていつでも女の運命は水と共にある。

虞美人草第十九章：『凝る雲の底を抜いて、小一日空を傾けた雨は、大地の髓に浸み込むまで降って歇んだ』

それはこの叫びが通じたのだろうか？ [アントニーとクレオパトラ第五幕第二場]

Dissolve, thick cloud, and rain; that I may say, The gods themselves do weep! (溶ける、厚い雲よ、雨となれ；神々が涙を流していると言えるように！)

(2013.10.19)

